

老子は孔子（紀元前551年・紀元前479年）と同時代の春秋戦国時代の人物とされていますが正確な生没年は不詳で、またその実在も疑われています。司馬遷の『史記』によれば中国・春秋戦国時代の楚の思想家で、姓は李、名は耳、字は聃。周王朝の守蔵宰(図書館)で司書をしていたが、周王朝が衰微していくのを嘆いて隱遁を決意し、都を去っていざこへともなく立ち去った。途中、国境の関所である函谷関の役人である尹喜が「先生はまさに隱棲なさうとお見受けしましたが、何卒私に(教えを)書いて戴けませんか」と、請われるままに書き残したのが後世に伝わる『老子道德経』(道教の根本経典)とされます。この書は、単に『老子』とも表記され、上下二編(「道教」・「徳経」、約五千言余り、計八十一章から成り)といっても400字詰原稿用紙13枚程度の分量)、上編が老子の根本思想である「道」という語で、下編がその作用としての「徳」という語で始まっているので『道德経』とも呼ばれます。

「老子」は「自然の摂理に学ぶ」と説いています。儒教の人為的な道德・学問を否定し、「あるがままに暮らすべきだ」という「無為自然」の道を老子の根本思想に据えています。

自然には善意も悪意もなく、無理をしない。ただあるがままに変化するだけ。「道德経」の中に自然な出来事は長くは続かないというたとえとして「飄風は朝を終えず驟雨は日を終えず」(つむじ風が朝の間じゅう吹き続けることはないし、にわか雨が一日中降り続けることもない)という有名な言葉があります。一方、人間は、意志を通そうとつい無理をしてしまうことが屢々ありますが、無理は長続きしません。また疲れ果ててしまつては、よい人生を送ることも出来ませぬ。老子は、道理にそぐわない無理を諫めており、過剰な自己顕示欲は抑止する心掛けが必要だとしました。

ところで、左党であればごなたも「存じの吟醸酒」「上善水如」(白瀧酒造)がありますね、この名は「老子」から採られたもので、その意は、一本当に素晴らしい生き方とは水のようなものだ。水は万物に利を与えているものの、自らを主張することなく、様々な器によって自らの形を変えて争わない(水は方円の器に従う)。皆が嫌がる低く湿った下の方に処して目立たず、しかも万物を潤している。これが自然の法に最も近い姿である。居場所を良い大地にし、澄んだ淵のような静かな心境で、仲間には仁を、語らいいには信頼を、善い政治で国を統治すれば、仕事はよく機能し、また時期を失するよつなことはない。水の偉大さは万物に順じ争わないこと。だから咎められるような事は無い。

それでは老子の思想のアウトラインをみていきましょう。尚、構成は参考図書1に準じています。

## ■道(タオ)

儒家の「道」が現実的な「生き方」を意味しているのに対して、老子の「道」は万物を生み出す原理のことです。宇宙や大自然のもっとも深奥にあつて、すべてのものを生み出していくエネルギー、タオは私たちが暮らす森や、川や、山や大地、そして、地球や宇宙のすべてに、あまねく満ちている。

●道の道とすべきは

道可道、非常道。名可名、非常名。無名天地之始、有名万物之母。故常無欲以觀其妙、常有欲以觀其徼。此兩者同出而異名。同謂之玄。玄之又玄、衆妙之門。

(第一章)

道の道とすべきは、常の道に非ず。名の名とすべきは、常の名に非ず。名無きは天地の始めにして、名有るは万物の母なり。故に常に欲無くして以て其の妙を觀、常に欲有りて以て其の徼を觀る。此の兩者は同じきより出でて而も名を異にす。同じく之を玄と謂う。玄之又玄は、衆妙の門なり。

※漢文は簡潔な上にも簡潔な表現をするので、文意の解釈は骨が折れますね。第一章の「道」は老子哲学の根幹をなす概念で、人間の分別知をもってしては「道」というものは雲・霞の如く掴めませんよということでしょうか。(西田哲学の純粹經驗を想起させます)

これが道だと示せるような道は絶対不変の道ではない(儒家では仁義などの道徳が人の依るべき「道」と説くが、これは言ってみれば人間世界の単なる約束事であって永久不変のものではない)。これが名だと示せるような名は、時間的・空間的条件が変われば名も変わり、絶対不変な恒常の名とはいえない。天地が生まれ始めるときにはまだ名はなく、天地が誕生し、天地という名がつけられると、そこから万物が生み出される母体となった(老子の言う「道」は天地の開闢以前に絶対不変の母体として存在している)。そこで、いつでも欲のない(知を働かさない)立場に立てば、「道」の微妙で奥深いありさまが見とれ、いつでも欲がある立場にたてば万物が活動する様々な結果が見えるだけだ。この二つのもの一微妙で奥深いありさまと、万物が活動しているありさまは、「道」という同じ根源からでてくるものだが、(微妙で奥深いとか活動しているとかいうように)違った言い方をされる。同じ根源からでてくるので、この根源のことを、「玄」一はかり知れない深淵といい、その深淵の更に一層奥深く幽かな所、そこは万物の微妙な現象が生まれてくる門である。

●道は沖しきも

道沖、而用之或不盈、淵兮、似萬物之宗。挫其銳、解其粉、和其光、同其塵。湛兮似或存。吾不知誰之子、象帝之先。

(第四章)

道は沖にして之を用いるも或に盈たず。淵として万物の宗たるに似たり。其の鋭を挫き、其の粉を解き、其の光を和らげ、其の塵を同じくす。湛として或に存するに似たり。吾誰の子なるかを知らず、帝の先に象たり。

※道は空っぽのように見え、そうであるからこそ、その効用は無尽だといいます。それは廣大・深淵な奥深い万物の根源であり、自然の理を表すものだと言っています。

「道」は空っぽな器のように何の役にも立たないように見えるが、それを満たそうとしても満ちる事がないくらいに遠大で、その懐の深さは万物を生み出す根源の深さ(廣大・深淵)でもある。それ(「道」)は鋭くどがった刃先(我欲と我欲のぶつかり合い)を丸くし、もつれた糸(世間の紛糾)を解きほぐし、光の輝きを和らげ(知に働けば角が立つ)、何でも無い塵(俗塵)と一つになる(←「道」を体得すれば、自己のすぐれた学徳や才能を深く包み込んで表に出さず俗世間に交わることができる柔和な穏やかな人物になれる。「和光同塵」)。「道」はまるで深く水を湛えた器の様に常に静かにそこにある。それはどこから生まれたのか解らないが、万物を司る天の帝(宇宙を統合する法則・原理・真理)よりもさらに以前から存在していたのだろう。

## ● 上善は水の如し

上善如水。水善利物而不争、処衆人所惡。故幾於道。居善地、心善淵、与善仁、言善信、政善治、事善能、動善時。夫唯不爭、故無尤。

(第八章)

上善は水の如し。水は善く万物を利して争わず。衆人の惡む所に処る。故に道に幾し。居には地を善しとし、心は淵なるを善しとし、与ふるには仁なるを善しとし、言は信なるを善しとし、政は治まるを善しとし、事には能あるを善しとし、動くには時なるを善しとす。夫れ唯だ争はず、故に尤無し。

※老子の言う「善」とは何を意味するのでしようか。老子ともあろうものがまさかケチ臭く道徳的な意味での「善」をいっているはずがありませんね。「善」は、物や人の本性の自由な用(はたらき)を指していると思います。

(道を体得した) 最上の境地は水に似ている。水は万物に恵みを与えながらもその功を誇らず、誰も嫌がる(低く湿った)ところに治まる。故に水の在り方というのは道に近いのである(無為自然：わざとらしい振る舞いをせず、自然に処すること)。身の置き所は低いところ(地)がよく、心は澄んだ淵のような静かな心境がよく、人との付き合い方は思いやり(仁)を持つのが良く、言葉は誠意をもつするのがよく、政治は平安無事に治まるのがよく、事をなすには能力のある方がよく、行動は適切な時期に行うのがよい。そもそも人と争わないから、咎められる事はない。

● 大道廃れて仁義有り

大道廢、有仁義。慧智出、有大偽。六親不和、有孝慈。國家昏亂、有忠臣。 (第十八章)

大道たいどうすた廃れて、仁義にぎぎ有り。慧智えいち出でて、大偽たいぎ有り。六親りくしんわ和せずして、孝慈こうじ有り。國家こんがく昏亂して、忠臣ちゆうしん有り。

※儒家の言つ仁義・忠義・孝行等々・・・上つ面な道德観や価値観の押しつけが始まったのは、人々が「大道」を忘れてしまったからだ、人間は学問をやつて知恵を持ちだすと、嘘や偽りを生み出してしまつものだと老子は指摘しています。

人が行つべき正しい道（大道―無為自然の道）が天下に行われなくなつてきたために、（儒家が説く）仁義の道などが幅を利かせはじめてきたのだ。（儒家による学問が奨励されたことで）知恵ある者が出てきたために、大いなる偽りがはじまつたのだ。親子、兄弟、夫婦の仲が不和になつたために、親や祖先によく仕える子や孫などが目立つてきたのだ。国が乱れてきたから、忠義を尽くす家臣などが目立つてきたのだ。

● 物有り混成し

有物混成、先天地生。寂兮寥兮、独立而不改，周行而不殆。可以為天下母。吾不知其名，字之曰道，強為之名曰大。大曰逝，逝曰遠，遠曰反。故道大、天大、地大、王亦大。域中有四大，而王居其一焉。人法地，地法天，天法道，道法自然。 (第二十五章)

物もの有あり混こん成せいし、天地てんちに先まだちて生うまいれず。寂せきたり寥りょうたり、独立どくたつして改かめず、周行しゅうぎやうして殆あやふからず。以もつて天下てんかの母ははと為なすべし。吾われ其そのの名なを知らず。之これに字あなして道みちと曰いひ、強こひて之これが名なを為なして大だいと曰いふ。大だいに逝せいと曰いひ、逝せいに遠えんと曰いひ、遠えんに反はんと曰いふ。故ゆに道みちも大だいなり、天てんも大だいなり、地ちも大だいなり、王わうも亦また大だいなり。域いき中ちゆうに四し大だい有あり。而しかして王わうは其そのの一いつに居をる。人ひとは地ちに法ほつり、地ちは天てんに法ほつり、天てんは道みちに法ほつり、道みちは自然じぜんに法ほつる。

※第1章で「道」は天地の開闢以前に絶対不変の母体として存在していると述べ、この章では「道」を「大」と名付けています。何を言っているのか掴みにくいところですが、次のように解釈できないでしょうか。万物は生成・消滅し、また生成し・・・と生成消滅の循環を繰り返しますが、それは自然の理法（「道」）に基づいているんだ、と。ところで、「王も亦た大なり」のフレーズは、「王」（時の最高権力者）に媚び入つらうニアンスが感じられなくもないですが、「天下の王たるものの資質」について言及していると読み解くと肯首・納得させられます。

いろいろなものが渾然と混ざり合って一つになり、それは天地より先に生まれだ。それは音も無く静かで形も無く、絶対独自の存在で、永久に不変であり、その用がすべての現象に行きわたって滅びることがない。このことから、これを天下万物を生みだす母といってよい。私は、それを何と名付けてよいか分からないので、仮に呼び名をつけて「道」と言い、無理に名前を付けて「大」と呼ぶことにする。「大」を「過ぎ去るもの」といい、「過ぎ去るもの」を「遠ざかるもの」といい、「遠ざかるもの」を「反ってくるもの」という。そこで道も大であり、天も大であり、地も大であり、道にのつとる王もまた大である。この世界には四つの大がある。そして、王はその一つを占めている。人は地にのつとり、地は天にのつとり、天は道にのつとり、道は自然にのつとつてゆく。

## ■ 無為

老子と言えば「無為自然」が登録商標(?)のようになっていますが、無為―何もせず、自然―唯々ぼくとしていればいいという意味ではないですね。むしろ、「為」を極限にまで高め、あとは運を天に任す―百尺竿頭に一步を進む―といった境地のことだと思えます。

### ● 天下みな美の美たるを知るも

天下皆知美之為美、斯惡已。皆知善之為善、斯不善已。故有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾、音声相和、前後相隨。是以聖人処無為之事、行不言之教。万物作焉而不辭。生而不有。為而不恃。功成而弗居。夫唯弗居，是以不去。

(第二章)

天下皆美の美たるを知るも、斯れ惡のみ。皆善の善たるを知るも、斯れ不善のみ。故に有無相生じ、難易相成し、長短相形はし、高下相傾け、音声相和し、前後相隨ふ。是を以て聖人は無為の事に処り、不言之教えを行ふ。万物作りて而も辞せず。生じて而も有せず。為して而も恃まず。功成りて而も居らず。夫れ唯だ居らず。是を以て去らず。

※巷間言つ美と醜、善と不善、長と短、等々は二律相対的な価値観に囚われている。これは「道」に反すると指摘します(道は清濁併呑の美相ということでしょうか)。学問等で獲得した知恵や己の身勝手な感情に振り回されること無く、自然(自然の理に逆らわず)に振るまつことが「道」の用きといつものだと書いています。

世間の人は皆、美しいものを美しいと認識するが、それは則ち醜を認識することに過ぎない。皆、この善こそ善であると認識するが、それは則ち不善を認識することに過ぎない(美と醜、善と不善などは表裏一体ということか)。だから、「有」があつて「無」が生まれ、「難」があつて「易」があり、「長」

は「短」があるから形となり、「高」は「低」があるからお互いの傾きができ、「音階」と「旋律」とは相手があって初めて調和し、「前」と「後」とは互いに順序をもつ。それゆえ、聖人（無為自然の道を体得した人）は、「無為」の境地に住んで、無言の教えを実行する。万物が活発に働きはじめても作爲を加えない。成育してきて我が所有とはしない。完成しても手柄とはしない。立派な成果があがっても、その栄光に居すわることがない。そもそのその栄光に居すわらないからころ、またその栄光から離れることもないのだ。

● 賢を尚ばざれば

不尚賢、使民不爭。不貴難得之貨、使民不為盜。不見可欲、使心不乱。是以聖人治、虛其心、實其腹、弱其志、強其骨、常使民無知無欲、使夫知者不敢為也。為無為、則無不治。

(第二章)

賢を尚ばざれば、民をして争わざらしむ。得難きの貨を貴ばざれば、民をして盗を為さざらしむ。欲すべきを見さざれば、心をして乱れざらしむ。是を以て聖人の治は、その心を虚しくし、その腹を實たし、其の志を弱くして、其の骨を強くし、常に民をして無知無欲ならしめ、夫の知者をして敢えて為さざらしむるなり。無為を為せば、則ち治まらざること無し。

※立身出世して偉くなりたいとか、貴重なものを手に入れ誇らしく見せびらかしたいとか、人間の（自己顕示）欲は天井を知りません。しかし、それらは頭があくまで相対的な価値観に占有されているからで、その内実は身勝手な欲望に起因するもですな。

ここでは為政者のあるべき姿を説いています。「常に民をして無知無欲ならしめ」というのは、相対的価値観から頭を開放させ、我欲の浅はかさを自覚徹底させるということなので、そのような統治を實踐できれば、世の中万事うまく治まっていくと主張しています。

為政者が賢者を尊び用いることがなければ、人民に競争心を起こさせることもないだろう。手に入りにくい珍しい品を尊ぶことがなければ、人民に盗み心を起こさせることもないだろう。欲しがるようなものを現し示すことがなければ、人民の心を乱れさせることもないだろう。それゆえ、無為自然の道を体得した聖人の統治は、つまらない雑念から人民の心を開放して頭を空っぽにし、腹の方を空腹にならぬように一杯にし、人民の望みを欲に囚われないように弱く小さくして、その肉体の筋骨の方を強く丈夫にし、常に人民を無知無欲の状態にさせておいて、世のいわゆる知恵のある人に何の手だしもできないようにさせるのである。このように無為をもって統治を實踐していけば、この世は万事うまく治まっていゆくのだ。

● 学を為せば日々に益まし

為学日益、為道日損。損之又損、以至於無為。無為而無不為。故取天下、常以無事。及其有事、不足以取天下。

(第四十八章)

学がくを為なせば日まに益まし、道みちを為なせば日まに損すず。之これを損しじて又また損しじ、以もつて無な為なに至いたる。無な為なにして為なさざること無し。故ゆに天下てんかを取とるには、常つねに事こと無なきを以もつてす。其そのの事こと有あるに及およびては、以もつて天下てんかを取とるに足たりず。

※学問を修めると小賢しい知識が蓄積し、それによる行為が煽り立てられるだけだ、と老子は(儒家の)学問の勤めを批判します。一方、「道」の修業に励めば次第に我欲が削ぎ落とされてゆき、究極「無為」の境地に達することができる。この境地に至れば何をすることも融通無碍、どんなことをしても自然の理にかなつことになると説きます。

学問を修めてゆけば、世俗的な知識が日ごとに増えてゆくし、道を修めてゆけば、世俗的な知識が日ごとに減ってゆく。減らした上にまた減らし、どんどん減らしてゆくとついには「無為」の境地に到達する。「無為」であれば、どんなことでもできないことはなくなる。だから天下を取るには、常に余分な人知人為(小賢しい知識や行為)を用いないで、あるがままの自然に振舞っていくゆくことである。自分の思い通りにしようと思ふ人知人為を用いるようになったら、もう天下を取る資格はない。

● 正を以て国を治め

以正治国、以奇用兵。以無事取天下。吾何以知其然哉。以此。天下多忌讳而民彌貧、民多利器、国家滋昏。人多伎巧、奇物滋起、法令滋彰、盜賊多有。故聖人云、「我無為而民自化、我好静而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自朴。」

(第五十七章)

正せいを以もつて国くにを治ちめ、奇きを以もつて兵へいを用もちいる。事こと無なきを以もつて天下てんかを取とる。吾われ何なにを以もつて其そのの然しかるを知しるや。此こを以もつてなり。天下てんか忌おそい諱かたが多くして民たみ彌いよいよ貧すくしく、民たみに利り器き多くして、国家こくか滋ますます昏くらむ。人ひと伎ぎ巧こう多くして、奇物きぶつ滋ますます起たち、法令ほうれい滋ますます彰あらかにして、盜賊たうさく多く有り。故ゆに聖人せいじん云いふ、「我われ無な為なにして民たみ自みづから化かし、我われ静せいを好このみて民たみ自みづから正ただしく、我われ無な事じにして民たみ自みづから富ふみ、我われ無な欲よくにして民たみ自みづから朴ぼくなり。」

※儒家・孔子のいう「政者正也」(正しい道をおこなうことが政治)や兵家・孫子の「兵者詭道」(軍事の基本は敵を欺くこと)は人知人為(「正」や「奇」はあくまで相対的なもの)を用いたもので、はなはだ当てにならないと老子は喝破します。ああすればこうする、こうすればああすると人民は常に利を求めて行動するものだ。したがって、人知人為を用いない政こそ、人民の無事平穏な生活を実現するものだと言っています。

国を治めるには正しいやり方で行い、戦をするには奇策を駆使して兵を用いるという。しかし、このような人知人為を用いないことによって天下を取ることが出来る。私がどうしてそうだと分かっているか。それは以下のことよってである。この世は、煩わしくも嫌って避けたい禁令が多くなるほど民は自由な働きを妨げられ、いよいよ貧しくなっていく。そのため生活に役立つ便利な道具を求めはじめると国はますます混乱してくる。人知による小賢しい技術が発達してくるほど怪しげなものが多く蔓延る。法令がますますきめ細かくなればなるほどその裏をかく盗賊が横行してくる。そこで、(道を体得した)聖人は言う「私が余分な人知人為を用いないでいると、民は自然に感化されてゆく。私が活動をせず静かにじっと見守っていれば民は自然と正しい行動をとるようになる。私がことさらに何かをしなくても民は自然に生活を豊かにしていく。私が無欲にしていれば民は自然に純朴な人柄になる。」と。

### ●小国寡民(ユートピア)

小国寡民、使有什伯之器、而不用、使民重死而不遠徙、雖有舟輿、無所乘之、雖有甲兵、無所陳之。使民復結繩而用之、甘其食、美其服、安其居、樂其俗、隣國相望、鷄犬之聲相聞、民至老死、不相往來。

(第八十章)

小国寡民、什伯の器有りて、而も用ゐざらしめ、民をして死を重んじて遠く徙らさず、舟輿有りて雖も、之に乗る所無く、甲兵有りて雖も、之を陳める所無からしむ。民をして復た繩を結びて之を用ゐ、其の食を甘しとし、其の服を美とし、其の居に安んじ、其の俗を楽しみ、隣國相望み、鷄犬の聲相聞こゆるも、民老死に至るまで、相往來せざらしむ。

※小国寡民(国土が小さく人口が少ない)は老子が考えた理想の国家形態(理想郷)。背景には、中国・戦国時代の富国強兵策を旗印とする群小諸国家の覇権主義(兵役強化・領土拡張・横行による人民生活の疲弊があります。当時の国家形態は無数に点在する農村共同体で構成されていたとされますが、難を逃れるべく人民は煩雑に移動を繰り返していたことでしょう。他国との往來のない自給自足の他と競わない「足るを知る」生活を実現させれば、おのずから戦争も起こらず、人々は心豊かに穏やかな生活を続けていけると説いています。

小さい国で少ない人民がよく、普通の人の十倍百倍の才能がある人がいても、それを用いる余地がないようにさせ、人民には自分の生命を慮らせて遠方に移住しないようにさせ、舟や車はあってもこれに乗らないようにさせ、甲冑や武器があっても(戦に向けて)並べて使うことがないようにさせる。人民にはまた(むかしに還って)縄を結んでそれを意思表示や伝達とする方法(「結縄」)を使わせ、自分の食べ物をうまいと思い、自分の着ている衣服を美しいと思い、自分の住居に満足し、自分たちの風俗習慣を楽しむようにさせたなら、隣りの国が互いにすぐに見えるところにあつて鶏や犬の声が聞こえ合うような状況にあつても、人民は老いて死ぬまで互いに往来することもないだろう(これが理想である。)

## ■ 柔弱

弱いものが強いものに勝ち、柔軟なものが、剛強なものを制する。老子はこの「理」をいろいろな喩を引き合いに出しながら繰り返し説いています。

### ● 曲なれば則ち全し

曲則全、枉則直。窪則盈、敝則新。少則得、多則惑。是以聖人抱一、為天下式。不自見、故明。不自是、故彰。不自伐、故有功。不自矜、故長。夫唯不爭、故天下莫能与之爭。古之所謂曲則全者、豈虛言哉。誠全而歸之。

(第二十二章)

曲なれば則ち全し、枉なれば則ち直し。窪なれば則ち盈ち、敝なれば則ち新なり。小なれば則ち得、多なれば則ち惑ふ。是を以て聖人は一を抱き、天下の式と為る。自らは見はさず、故に明なり。自らは是とせず、故に彰りかなり。自らは伐らず、故に功有り。自らは矜らず、故に長たり。夫れ唯だ争はず、故に天下能く之れと争ふもの莫し。古の所謂曲なれば則ち全しとは、豈に虚言ならんや。誠に全くして之に歸す。

※諺に「出る杭は打たれる」というのがあります。「承知のように、自分の才知・才能をひけらかすとまわりは離反し、足を引つ張られることになる」という意味ですが、松下幸之助は「出過ぎた杭は打たれない」という名言を残しています。この「出過ぎた」というのは突出したという意味ではなく、「突出」を通り越してしまって周囲にはその秘した力が覚知されないという意味とします。したがって、周りからは凡才のように見られ、争いごとともに起こらず万事うまく行くようになる(曲全の道)。

曲がった樹は（役に立たないので伐られずに）天寿を全うするし、尺取虫は身を屈曲するから真つすぐ進む。窪んだ地には水が満ちるし、着古した弊衣であれば新しくなる。欲が少なければ必ず手に入るし、多くを求めだすと惑い迷わされる。それゆえ、聖人は多くのことには目もくれず、「道」を専一に守って、天下の模範となつてゐるのだ。自分で自分を誇示しないからこそ誰もが気づくところとなる。自分で自分を正しいとしたりはしないからこそ誰もが認めるところとなる。自分を自ら自慢したりはしないからこそ功績が認められる。自分からは尊大ぶらないからこそ皆から長と仰がれる。そもそも我をたてて他人と争うということをしなから、世の中に彼（聖人）と争う者はいない。古人のいわゆる「曲がった木は天寿を全うする」という言葉はどうして虚言であろうか。誠に（人も曲がった木となつて）天寿を全うすることによって、その身を大自然に帰一してゆくののである。

### ● 江海の能く百谷の王たる

江海所以能為百谷王者、以其善下之、故能為百谷王。是以聖人、欲上民、必以言下之。欲先民、必以身後之。是以聖人、処上而民不重、処前而民不害。是以天下樂推而不厭。以其不争、故天下莫能与之争。

（第六十八章）

江海の能く百谷の王たる所以の者は、其の善くこれに下るを以てなり、故に能く百谷の王たり。是を以て民に上たらんと欲すれば、必ず言を以てこれに下り、民に先んぜんと欲すれば、必ず身を以てこれに後る。ここを以て聖人は、上に処るも而も民は重しとせず、前に処るも而も民は害とせず。ここを以て天下は推すことを楽しみて厭わず。その争わざるを以て、故に天下能くこれと争うことなし。

※長江や大海が幾多の谷川より低い所にあることによつてその王となるように、君主も人民にへり下ることによつてその統治者・指導者となることができ。また、威を借りて人と争ったりしてはならない。「謙下・不争」（謙虚にへりくだり・決して争わない）の徳で治世を行うのが為政者のあるべき姿だと説きます。

長江や大海が多く谷川の王となることができている理由は、それがへり下つて低い所にいるからである。だから多くの谷川の王となることができているのである。そこで聖人は、人民の上に立つて統治しようと思ふなら、必ず自分の言葉を謙虚にして人民にへりくだり、指導者となつて人民の先頭に立ちたいと思ふなら、必ず自分の振る舞いを抑えて人の後からついていくものだ。それゆえ、聖人は、人民の上（高位の立場）にいても人民は重荷とは思わないし、人民の前（指導者として人民の先頭に立つ）にいても人民は邪魔だとは思わない。それだから天下の人々は喜んで彼を推戴して、だれも嫌がらないのだ。聖人はまた他人と争うことがないので、天下に聖人と争うことのできるものは誰もいないのだ。

●人の生まれるや柔弱

人之生也柔弱。其死也堅強。万物草木之生也柔脆。其死也枯槁。故堅強者死之徒、柔弱者生之徒。是以兵強則不勝、木強則共。強大処下、柔弱処上。  
(第七十六章)

人の生まるるや柔弱なり。其の死するや堅強なり。万物草木の生するや柔脆、其の死するや枯槁す。故に堅強なる者は死の徒にして、柔弱なる者は生の徒なり。是を以て兵強ければ則ち勝たず、木強ければ則ち共る。強大なるは下に処り、柔弱なるは上に処る。

※柔弱こそが生命の本源(「道」)だとしています。

人が生まれたときには体は柔らかくて弱々しい。しかし、死んでしまうと堅く強まる。万物や草木も、生まれた時には柔らかくて脆そうだが、朽ち果てる時には干からびてからからになってしまふ。だから、堅くて強ばつたものは死の仲間であり、柔らかくて弱々しいものは生の仲間である。それゆえ、軍隊は堅強であればそれを頼みとしてかえつて戦に勝てず、木は堅くて強ければかえつて折れてしまつ(柳に雪折れなし)。ものごとは堅固で大きなものは低い下位にとどまり、やわらかで弱々しいものが高い上位に立つものである(前文も参照)。

●天下の柔弱なるもの水に過ぐるは莫し

天下柔弱、莫過於水。而攻堅強者、莫知能勝。其無以易之。弱之勝強、柔之勝剛、天下莫不知、莫能行。故聖人云、「受国之垢、是謂社稷主、受国之不祥、是謂天下王。」正言若反。

(第七十八章)

天下の柔弱なるもの、水に過ぐるは莫し。而も堅強を攻むる者、能く勝るあるを知るもの莫し。其の以て之に易はる無し。弱の強に勝ち、柔の剛に勝つは、天下知らざるもの莫きも、能く行ふもの莫し。故に聖人云ふ、「国の垢を受くる、是を社稷の主と謂ひ、国の不祥を受くる、是を天下の王と謂ふ。」と。正言は反するがごとし。

※古代中国の兵法書『三略』に「柔よく業を制する」との言葉が載っていますが、老子は「柔」の極みとして「水」を取り上げます。韓非子には「水は方円の器に随つ」と書かれていますが、老子は、融通無碍な立ち振る舞いが

できる人こそ天下の王たるものだと言っています。「正言は反するがごとし」―真理にかなった正しい言葉は、一見真実とは反対のことのように聞こえる、老子特有の逆説的言い回しですね。

この世で柔らかかく弱いものといえ水以上のものはない。しかし、固くて強いものを攻めるのに水に勝るものがあると知っている人はいない。そのときに水に代わるものがないのである（水が最強である）。弱いものが強いものに勝ち、柔らかいものが剛いものに勝つということは、この世に知らない人はいないが、その道理を実行する人はいないのである。そこで聖人はこう言う、「国家の汚辱を甘んじてその身に受ける人、それを国家の主というし、国中の災いを受け入れる人、これを天下の王と言っているのである。」と。正しい言葉というものは、しばしば常識に反するように見えるものである。

---

●参考図書

- ・鎌田正監修 江連隆・若林力「漢文名作選1」昭和59年 大修館書店
- ・金谷治「老子」2013年 講談社学術文庫